主日礼拝説教「いただきもので生きる」予稿

日本基督教団石神井教会　2022年1月30日

【旧約聖書日課】歴代誌上　29章6～19節

6すると、家系の長たち、イスラエル諸部族の部族長たち、千人隊と百人隊
の長たち、それに王の執務に携わる高官たちは、自ら進んで、7神殿に奉仕す
るために金五千キカル一万ダリク、銀一万キカル、青銅一万八千キカル、鉄
十万キカルを寄贈した。8宝石を持つ者は、それをゲルション一族のエヒエル
の手に託して主の神殿の宝物庫に寄贈した。9民は彼らが自ら進んでささげた
ことを喜んだ。彼らが全き心をもって自ら進んで主にささげたからである。
ダビデ王も大いに喜んだ。

10ダビデは全会衆の前で主をたたえて言った。「わたしたちの父祖イスラ
エルの神、主よ、あなたは世々とこしえにほめたたえられますように。11偉
大さ、力、光輝、威光、栄光は、主よ、あなたのもの。まことに天と地にあ
るすべてのものはあなたのもの。主よ、国もあなたのもの。あなたはすべて
のものの上に頭として高く立っておられる。12富と栄光は御前にあり、あな
たは万物を支配しておられる。勢いと力は御手の中にあり、またその御手を
もっていかなるものでも大いなる者、力ある者となさることができる。13わ
たしたちの神よ、今こそわたしたちはあなたに感謝し、輝かしい御名を賛美
します。14このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でし
ょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、
わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。15わたしたち
は、わたしたちの先祖が皆そうであったように、あなたの御前では寄留民に
すぎず、移住者にすぎません。この地上におけるわたしたちの人生は影のよ
うなもので、希望はありません。16わたしたちの神、主よ、わたしたちがあ
なたの聖なる御名のために神殿を築こうとして準備したこの大量のものは、
すべて御手によるもの、すべてはあなたのものです。17わたしの神よ、わた
しはあなたが人の心を調べ、正しいものを喜ばれることを知っています。わ
たしは正しい心をもってこのすべてのものを寄進いたしました。また今、こ
こにいるあなたの民が寄進するのを、わたしは喜びながら見ました。

18わたしたちの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、これを
あなたの民の心の思い計ることとしてとこしえに御心に留め、民の心を確か
にあなたに向かうものとしてください。19わが子ソロモンに全き心を与え、
あなたの戒めと定めと掟を守って何事も行うようにし、わたしが準備した宮
を築かせてください。」

【福音書日課】マルコによる福音書　1章40～45節

40さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずい
て願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言っ
た。41イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。
清くなれ」と言われると、42たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなっ
た。43イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、44言わ
れた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司
に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさ
い。」45しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、
言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町
の外の人のいない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところ
に集まって来た。

「清くなれ」【こども説教のために】

新型感染症の新しい変異株が広まっていることで、わたしたちの生活が再び窮屈になってきました。誰もが感染している可能性があるとも言われていますが、実際に感染したと診断された人だけでなく、その周囲で生活をしていた人たちまで活動を止めなければいけないとされて、困窮している人もあるようです。検査の結果を正しく判断して医師が診断してくれていればよいのですが、検査結果だけが独り歩きしているのだとしたら、困りものです。

かつて、感染が診断されると家族からも引き離されて隔離生活を強いられた病気がありました。社会から離れた場所、施設などに隔離され、病気が回復するまで、場合によっては一生涯、そこに留められたのです。日本でも、つい最近までそのような生活を強いられた元患者の人たちがいらっしゃいました。その病気に罹っていることが診断されたら療養所に隔離されて、さまざまな生活上の制約が強いられると、法律で定められている病気があったのです。長くその療養所で生活してきた人たちの多くは、法律が廃止された後も、元の家族のもとに帰ることもできずに、そのまま療養所に留まられました。今でも、そのような方々がいるのです。

主イエスの時代、「重い皮膚病」と診断される病気がありました。現代医学とは違いますが、「律法」に厳密な診断基準があって、祭司が診断を下したのです。「重い皮膚病」と診断された人は「あなたは汚れている」と宣告され、回復したと診断された人は「あなたは清い」と宣言されました。

主イエスは、重い皮膚病を患っている人が近づいてきたとき、「清くなれ」と宣言されました。その人がそう願ったので、主イエスは手を差し伸べて触れ、その人がもはや清くなっていることを明らかにしてくださったのです。

「行って…証明しなさい」

主イエスがその人に対してなさったのは、本来、祭司が果たすべきことでした。彼が「清い」か「汚れている」か、判断して告げるのは、祭司の役割でした。「律法」をよくご存じの主イエスであれば、もちろん、そのことを理解されていたはずです。

「レビ記」（13~14 章）によれば、「重い皮膚病」に限らず「皮膚病」は、罹患していることを診断するのも、回復したことを診断するのも、祭司の役目です。「重い皮膚病」と診断されていた人は、「宿営」の外に隔離されました。隔離されていた病人が回復したことを診断するためには、祭司が「宿営」の外にある隔離施設に出向くことになっていました。

その人は、なぜ、祭司に来てもらうことを求めず、主イエスのところに来て願ったのでしょうか。主イエスが**いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし**（マルコ 1:34）ていらっしゃるという噂を聞きつけて、自分の「重い皮膚病」もいやしてもらえると考えたからでしょうか。そうかもしれません。けれども、彼が主イエスに願ったことは、「いやし（テェラペイア）」ではなく、「清め（カタァリスモス）」です。「律法」の定めに従って「あなたは清い」と宣言してもらうことを、彼は願ったのです。それは、彼の「重い皮膚病」が、実のところすでに回復していたからではないでしょうか。回復していたのに、祭司に来てもらえず、「あなたは清い」と宣言してもらえないままになっていたからではないでしょうか。

主イエスは、わたしたちの信仰においては「祭司」でいらっしゃると言えますが、ユダヤ人社会の中で祭司の身分でいらしたわけではありません。祭司ではないのに、祭司が行うべき病気回復の宣言をするとすれば、それは越権行為であることを、主イエスはご存じであったはずです。けれども、主イエスは、彼に向かって、彼が望んだとおり、宣言されました、「**よろしい。清くなれ**」と。ただ、主イエスは、彼が「律法」に従って祭司のいる神殿に出向き規定の奉納物をささげるようにと、続けられたのです。

実のところ、主イエスには多少の迷いがおありだったのではないでしょうか。祭司を彼のもとに連れて来て、「あなたは清い」と宣言させることもできたかもしれないのです。そうすべきだとも思われていたはずです。ところが、それが難しい現実があることも、知っていらしたのでしょう。町の中心にいる祭司に時間を割いて町はずれの隔離施設まで来てもらうことは、それほど容易ではなかったかもしれないのです。予定を空けてもらえるのはいつになるのか。送り迎えに手間賃まで、どれだけ負担すればよいのか。その現実をご存じであればこそ、もはや彼を放置しておくことは、ありえなかったのではないでしょうか。

人の心が神に向かうために

主イエスの時代、確かに祭司が現代の医師の役割を果たしていたのです。現代社会に生きるわたしたちは、医師の診断を待たずに、勝手に人の病気について判断しようとすれば、批判されるでしょう。自分の身体のことならばともかく、人の病気のことを素人が判断するなどあり得ないと、多くの者が考えるでしょう。それが正しい考えかどうかは別にして、そう考えるのが社会の中では妥当だと思われているのです。

主イエスが祭司の専門職としての診断を待たずに病気の回復を宣言して、隔離を解いてしまうというのは、普通に考えればありえないことだったはずです。それでも、主イエスは、敢えて祭司の代りに「あなたは清い」と宣言されたのです。社会の仕組みとして定められていることが、現場では機能していない現実を目の当たりにされたからではないでしょうか。

「そんなことをして、もしも彼がまだ本当は回復していなかったら、どうするつもりだ」と批判されたかもしれません。けれども、彼は、「あなたは清い」と宣言してもらえるまで、町はずれの隔離施設に閉じ込められていなければならなかったのです。同じ病気の者は同居していたかもしれませんが、家族や友人、またほかの誰とも会うことは許されないままになっていたのです。安息日に会堂に行き、共に礼拝することもできませんでした。もちろん、神殿に参拝することもできません。それは、ユダヤ人として生きる限り、神から見放されているに等しい現実であったはずなのです。そのようなところに留められ続ければ、彼の神に向かう心は、いつしか萎え衰えてしまったのではないでしょうか。

主イエスが、彼を立ち去らせて、真っ先に祭司のもとに行って、奉納物を献げる礼拝をするように言われたのは、それが「律法」の規定であったからです。けれども、それだけではなく、彼が神のもとに立ち帰ることを願われたからでもあるのではないでしょうか。

主イエスが何よりも心砕かれたのは、人の心が神に向かうようになることでした。繰り返し神の御前に立ち帰る生活を、だれもが取り戻すようになることでした。そのために、目の前の一人の人に対してできることをしないままでいるようなことは、主イエスにはありえなかったのです。

いいえ、主イエスには確信がおありだったはずです。すべてのものは清い、という確信です。「**天と地にあるすべてのものはあなたのもの**」と、旧約の信仰者が祈った言葉を、主イエスもご存じでした。すべてが神から与えられたいただきものであれば、病気であれ、病人であれ、清くないものがどこにあるでしょうか。目の前の一人に向かって「あなたは清い」と、わたしたちも告げることができるようになることを、主は願われているはずです。